WEBで読む「建設通信新聞」
PCで「建設通信新聞」記事検索・メール配信
日経テレコン21／Factiva／G-Search／NewsWatch
⇨http://www.kensetsunews.com/database
工事情報の検索なら「WEB版 建設工事の動き」
⇨http://www.kensetsunews.com/ugoki
ケータイで読む
http://m-kensetsu.jp

THE KENSETSU TSUSHIN SHIMBUN
建設通信新聞
Architectures, Constructions & Engineerings News (Daily)
2009年（平成21年）6月30日（火曜日）（第三種郵便物認可）

建設業界特化型のブログポータル
建設総合ブログ
Construction Cyber Community
http://www.kenblog.jp/

既存駐車場そのまま緑化

堺市に本社を置く八木萬（八木重美社長）は、スナゴケを使った駐車場緑化「モスベースパーキング」の販売を始めた。6年前から研究を進めてきたスナゴケによる建物緑化技術を応用し、近年普及し始めた駐車場緑化の市場に参入、芝生緑化より維持管理が容易で、アスファルトやコンクリートの既存駐車場をそのまま緑化できる。施工費用も、芝生緑化とほぼ同額という。

同社は2003年12月、堺市内の企業から分社独立した。耐火レンガ・材料の販売を始め築炉、耐火工事などを主に手がけている。その一方で創業当初から「環境を考える新事業を通じて、何か社会貢献ができないかと考えていた」（八木社長）。

そんな折、大阪府立大大学院の村瀬治比古教授の紹介で、スナゴケを使った建物緑化の存在を知った。「これだ」とばかり、八木社長はスナゴケ緑化の研究開発に取り組み始めた。

◇　◇

スナゴケの最大の特性は、乾燥に強い点にある。八木社長の子息・重治専務は、「コケといえば湿気のある場所で育つイメージが強いだけに、むしろまったく違うものと思ってほしいくらい」と説明する。スナゴケはもともと日当たりの良い場所で繁殖するため、水を与えないと仮死状態になる。だが水を与えるとすぐに生気を取り戻し青々と育つ。自重の約10倍もの保水性を持つほか、二酸化炭素（CO_2）を固定させる能力にも優れているという。

06年には三重県伊賀市に、スナゴケ栽培専用工場を開設した。同工場を中心に研究開発を進めた結果、現在では1年程度の育成期間で、安定した品質のスナゴケを供給できる体制を確立した。

これまで同社は屋上緑化中心にスナゴケを売り込んできた。縦横30・5㌢、厚さ3㌢の多孔質レンガでできた専用基盤にスナゴケを植え込んだ「モスベースガーデン」は、軽量性とメンテナンス性が高い。

しかし他社の芝生緑化と比べて、2倍近いイニシャルコストがネックとなっていた。そこで新たな緑化の分野を探した結果、目をつけたのが駐車場緑化だった。

◇　◇

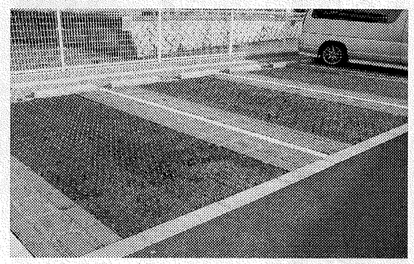
駐車場緑化は現在、芝やタマリュウなどが一般的だ。植物を植えるためには土が必要となり、既存駐車場の場合はアスファルトやコンクリートを撤去しなければならない。枯らさないためには散水、施肥、草刈りとこまめな維持管理も不可欠になる。

維持管理が容易 スナゴケを使用

一方、モスベースパーキングは芝生緑化などで一般的に用いられる基盤の上から厚みを調整するための砂を敷き、その上からスナゴケを敷きつめるだけ。土に根付かせる（活着）必要もないことから、アスファルトやコンクリートの上からそのまま緑化することも可能だ。草刈りや肥料も不要で、乾燥に強い分、冬場に枯れることもない。夏場でも1日1回程度の散水で十分という。

八木社長は「芝生と違って、メンテナンスの手間は大きく省かれる」とメリットを強調する。費用も1平方㍍当たり約2万5000円と、芝生駐車場とほぼ変わらない価格を実現した。

当面は首都圏と関西圏を中心に展開し、今期は駐車場160台分で売り上げ5000万円、3年後にはその倍の1億円を目標とする。コンビニエンスストアを始めとする商業施設などでアピールしていく方針だ。「駐車場でスナゴケ緑化の実績をつくり、需要を伸ばすことで、屋上・壁面緑化でのコストダウンにもつなげていきたい」（八木専務）。


スナゴケを使用した駐車場緑化

本社事務所ビルの屋上もスナゴケで緑化している。猛暑の続いた昨年夏は降雨以外に散水をしなかったが、スナゴケは枯れなかった

施工コストも芝生とほぼ同額

会社概要

▷創立＝2003年12月10日
▷所在地＝〒591―8041　堺市北区東雲東町３―１―12
▷電話番号＝072―255―6643
▷ファクス＝同6644
▷資本金＝2,000万円
▷事業内容＝耐火レンガなど販売、工業窯炉設計施工・工事、緑化事業
▷ＵＲＬ＝http://www.yagiman.jp/
▷電子メール＝info@yagiman.jp

この企業 この人

（株）八木萬　社長　八木（やぎ）　重美（しげみ）氏

建設論評

数字に表せない評価

建設が一時凍結されていた愛媛県久万高原町と高知県梼原町を結ぶ国道440号地芳道路の事実上の凍結解除が決まった。四国地方整備局の事業評価監視委員会は「事業を継続することは妥当」と結論づけた。建設コストに見合った効果が期待できないとして凍結対象になっていた地芳道路は、全体の86％が完成し、すでに一部は供用されている。これまでの投資も考えると、単純に費用対効果で評価し、凍結することには大いに疑問があった。

鉄道がなく地域の足となっている国道440号は、松山市を起点に梼原町内の国道197号を終点とする。「行くな（197）酷道」といわれるほど、国道と呼ぶにはあまりに悪路だ。国道440号もその数字の大きさから推察できるように同様である。四国山地の急峻な山岳地帯を縫うように通過しているため、道幅が狭く急カーブや急勾配の区間が多い。ガードレールのないところもある狭隘な道路は、国道と呼ぶにはあまりにお粗末だった。安全性に問題があるだけでなく、冬季は積雪や凍結で通行規制された。

そこに地芳トンネルを建設することで、急カーブ区間の線形が改良され、見通しもよくなる。道幅も拡幅される。松山市と高知市を結ぶ幹線道路の国道33号も通行止めが多く、その代替道路として、また中山間地の救急医療体制の強化につながることが期待されている。利便性の向上だけでなく、地域の住民の医療や福祉の向上につながることから、地元の期待は大きく、だからこそ用地買収に積極的に応じてきたのであろう。

地芳道路の整備により走行距離は23・5㌔から8・9㌔に短縮され、柳谷地区～梼原町間の所要時間が約45分から約11分に短縮される。久万高原町西谷地区の住民は、救急病院までの所要時間が、梼原町の救急病院に行くことで半分の20分ほどになるということだ。

先般の凍結で、愛媛県側と高知県側が掘進していた地芳トンネルの工事が、あとわずかで貫通するところなのに、途中でストップした。この地域は四国山地の急峻な地形で、林業が中心の過疎地域になっている。西谷地区の住民は3分の2が65歳以上だと聞く。単に費用対効果で計算すれば、不要と判断されるのも仕方ない面はあるが、そもそも道路の整備を費用対効果だけで考えるには無理があるのではないか。観光客や企業の誘致など、地域の活性化のために道路は欠くことができない。過疎化を防ぐためにも道路は必要だ。

地方では移動手段として車は不可欠なのだ。大都市のように電車やバスなどの公共交通が十分な状況にはない。電車やバスも経営面から、収益の上がらない路線は廃止する。民間運営だから利益を優先するのは仕方がない。

だからこそ、公共工事の意義、在り方を再確認することが必要なのである。財政状況が厳しく、費用対効果、効率を重視するのは仕方ないかもしれないが、目先や数字に表れるものだけでなく、数字に表れない、表せないことも評価しなければならない。

（三）